

特別支援学校における道徳科授業の実践に関する研究動向

—学習指導要領に基づく指導・支援と教育課程編成の充実に向けて—

青木 利樹（那珂川町立小川小学校）・田中 亮（塩尻市立桔梗小学校）・
奥住 秀之（東京学芸大学）・大井 雄平

要旨：特別支援学校における道徳科授業の実践について、教育課程上の位置づけを確認したうえで、その研究動向について整理をした。知的障害特別支援学校の実践においては、児童生徒が発達段階に応じて、主体的に道徳的価値について考えを深めることができるよう（1）選択カードの利用や翻訳的支援による表現の多様化、（2）体験活動の導入、（3）コミュニケーションスキルに応じたグルーピングなどの指導上の工夫が行われていた。それらの指導上の工夫は小学校・中学校における指導・支援の構築並びに教育課程の編成への活用も期待されることが考えられた。一方で、特別支援学校における道徳科授業の実践に関する論文が少ないことから、今後の研究の蓄積の必要性が課題として挙げられた。

キーワード：道徳科授業 特別支援学校 学習指導要領 指導法

1. 目的

2017年、戦後9回目の学習指導要領改訂が行われた。今回の改訂では、学校と社会のつながりや主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の重視、そして近年メディア等でも話題となることが多いプログラミング教育・外国語教育などの導入が大きな特徴であった。

グローバル化や価値観の多様化によってこれまでの常識が大きく変化しつつある現代社会において、今回の学習指導要領改訂での注目すべき点としては、道徳の教科化である。まず、改訂に先んじて、2015年度には「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）が教科として新設され、移行期を経て小学校、中学校、特別支援学校において完全実施となった。改訂の要点として、文部科学省による検定教科書が導入されたことや評価が導入されたこと、主題とする内容の項目を発達段階に応じて体系的になったことが挙げられる。道徳科はよりよく生きる基盤となる道徳性を養うことを目標とし、道徳教育の要として位置づけられている。さらに児童生徒が自己を見つめ、多面的・多角的に道徳的価値について考えを深められるよういわゆる「考え、議論する道徳」の実現に向けた道徳科の特質を生かした学習活動の工夫が求めている（文部科学省，2018）。

また、道徳科の授業実践を行う上では、障害等のある児童生徒への「困難の状態」に合わせた配慮が必要であることが記述されており（文部科学省，2018）、予想される指導上の具体的な困難と配慮例についても示されている（文部科学省，2016）。青木・奥住・大井（2021）は、道徳科の内容と学習障害等発達障害のある児童への特別な指導内容と関係のあることを指摘している。また、青木・田中・奥住（2021）や青木（2022）のように通常の学級の道徳科における発達障害のある児童への支援に関する報告もなされている。

一方、課題として特別支援学校における道徳教育に関する実践の報告・検討の数が少ないことが挙げられている（細川・眞城・磯山，2017）。独立行政法人国立特別支援教育総合研究所のインクルーシブ教育実践事例データベースにおいても、特別支援学校における道徳科を中心に据えた実践報告はまだ数件に留まっている（国立特別支援教育総合研究所，2022年8月19日検索）。

そこで、本稿では、今後ますます注目されてくることが予想される特別支援学校における道徳科授業の実践について、まずは教育課程上の位置づけを確認したうえで、研究動向について整理することで、今後の道徳科授業における指導・支援のあり方と教育課程編成に向けた今後の展望について検討することを目的とする。

2. 特別支援学校における教育課程上の道徳科の位置づけ

まず、特別支援学校における道徳科の教育課程の位置づけを整理する。

特別支援学校学習指導要領には道徳科の目標及び内容は、小学校又は中学校学習指導要領の内容に準ずることに加えて、以下の3点が示されている（文部科学省，2017）。

- 1 児童又は生徒の障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服して、強く生きようとする意欲を高め、明るい生活態度を養うとともに、健全な人生観の育成を図る必要があること。
- 2 各教科、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動及び自立活動との関連を密にしながら、経験の拡充を図り、豊かな道徳的心情を育て、広い視野に立って道徳的判断や行動ができるように指導する必要があること。
- 3 知的障害者である児童又は生徒に対する教育を行う特別支援学校において、内容の指導に当たっては、個々の児童又は生徒の知的障害の状態、生活年齢、学習状況及び経験等に応じて、適切に指導の重点を定め、指導内容を具体化し、体験的な活動を取り入れるなどの工夫を行うこと。

また、知的障害特別支援学校高等部においても、道徳科が教育課程に位置づけられており、小学部・中学部における目標や内容を基盤とし、青年期の特性を考慮して、健全な社会生活を営む上に必要な道徳性を一層高めることに努めることとされている（文部科学省，2019）。知的障害特別支援学校では特に必要がある際には教科・領域等を合わせて指導を行うことが可能となっているが、国立大学附属特別支援学校を対象とした齋藤（2021）の報告によれば、道徳科の時間を設けているのは3割以下であり、7割以上が道徳科の時間を設けずに教育活動全体を通じて実施している。また、齋藤は同論文で道徳教育を実践する授業として「日常生活の指導」や「生活単元学習」が多いことを報告している。

なお、連続性のある「学びの場」の考え方に基づけば、自立活動での指導で考えたことや感じたことを道徳科で道徳的価値について考える際に活かすなど、道徳科と自立活動が相互に作用しあう指導を心掛けることが必要であろう（奥住，2021）。そのためには、松本（2021）や細川・眞城・磯山（2017）が指摘するように道徳教育が各教科等においてどのように関連するのかを計画的に・組織的に行う必要が生じている。

3. 特別支援学校における道徳科授業の実践に関する研究動向

3. 1. 調査の方法と結果

国内学術論文検索サイト CiNii において「特別支援学校」「道徳」と検索し、該当した論文のうち道徳科が教科化された 2015 年以降の研究について整理した。移行期の実践研究においては内容を吟味し、道徳科として扱っているものを対象とした。

なお、授業実践の際に多くの教師が閲覧できること前提とするために、検索の際の設定を「本文・本体へのリンクあり」とし、オープンアクセスの論文のみを対象とした

調査の結果、道徳教育の実践を踏まえた研究は 12 編が該当した。そのうち、知的障害特別支援学校での実践が 11 編、肢体不自由者特別支援学校での実践が 1 編であった。なお、聴覚障害特別支援学校、視覚障害特別支援学校、病弱特別支援学校での実践に関する研究の該当はなかった（2022 年 8 月 20 日検索）。

3. 2. 知的障害特別支援学校での道徳科授業の実践に関する研究動向

知的障害特別支援学校での実践を踏まえた研究は小学部が 1 編、中学部が 5 編、高等部が 5 編であった。

まず、小学部については松本（2021）が「知的障害教育における道徳教育の仮説モデル」を構築し、指導方法の検討を行っている。松本の提案する「道徳教育の仮説モデル」の要点は、(1) 行動や言葉などの道徳的実践力や道徳性を育成する際に体験活動を中心に据えること、(2) 道徳的実践力の習得ののちに道徳性を育むことである。松本はモデルの実践の中で、「体験活動」を計画的に位置づけることで児童にとって抽象的な内容項目も「自分事」としてとらえることができると報告している。また、具体的な行動を獲得していくうえで、児童がその行動の必要性を理解し、さらに道徳的実践力も向上し日常生活に般化されていくことが報告されている。

次に、中学部については、細川・眞城・磯山（2017）は生活単元学習での道徳教育の実践を報告している。集団の中で役割をもたせ、集団の一員として活躍できることが重要であり、そうすることで「してもらおう」体験が多い生徒が「する」体験をすることができ、感謝される経験からうれしさや心地よさ、やりがいを実感できることを報告している。また、知的障害のある児童生徒への道徳教育の際には具体的な体験と切り離さないことが特に重要だとしており、学習活動との関係を明確にする必要性を指摘している。今井（2020）は発言することも記述することもほとんどできない緘黙のある生徒の評価方法について授業観察のなかで検討している。緘黙のある生徒に対して教師が代弁している場面を取り上げ、教師が代弁・翻訳することで生徒の主体性が向上することを指摘しており、これらの子どもの考えを代弁したり翻訳したりする行為は道徳教育に限らず、教育そのものを支えていることを報告している。一方で、これらの翻訳的支援の際の発言の妥当性が課題として挙げられた。それを受け、今井（2021）では、翻訳的支援の妥当性について検討している。生徒が気持ちを言葉にできずにもどかしくしている事例、教師の声掛けを繰り返し意見が生徒の主体的なものか疑わしい事例を取り上げている。今井は同論文で、不確定な生徒の思考が教師の翻訳によって確定されることを指摘しており、教員の翻訳的な支援は、なくてはならない不可欠なものだとしている。日置・本吉・今井・高崎（2021）は学校行事と関連づけその時の自分を思い出しながら道徳的価値について考え

る実践を報告している。写真や動画、ICT 機器を使用することで、自分自身について振り返りしやすくなったと報告している。山崎・伊藤・水内（2021）はプログラミング教育と道徳教育を関連付けた実践を報告している。「生命の尊さ」を主題に「食育」をテーマとし、プログラミングを利用し食品ロスの軽減を啓発する活動を行った。最終的には啓発を促した生徒自身の残飯量が軽減され、体験活動の中で生徒の食品や生き物への感謝が高まったことが報告されている。

このように、義務教育段階における知的障害特別支援学校における道徳科授業の実践に関する研究動向を概観すると、体験活動を取り入れたり、写真や動画を用いたりするなど児童生徒が道徳的価値について自分事として考えられるような指導上の工夫が行われていることが推察される。また、言語を用いた表現に困難がある児童への翻訳的支援が取り入れられていることが推察された。

高等部については、遠藤・松尾・面川・川井・齋藤・幸阪（2017）は「問題解決的な学習」を取り上げて実践を行っている。集団の実態に応じた「問題」を捉え、授業の内容を工夫することで、授業後から徐々に変化が見られた生徒がいたことを報告している。下崎・百瀬（2018）は作業学習の中で、「考え、議論する道徳」を図るために問題解決的な学習を行っている。下崎らは同論文で問題解決的な学習を行うための視点として以下の4点をあげている。(1) 生徒が主体的に考えることができる問いの設定すること、(2) 生徒が問いに対して考えをもつための適切な支援を行うこと、(3) 多様な人の考えを聞く機会を設けること、(5) 生徒が最終的に振り返り、考えをまとめる場を設けることである。さらに、ワークシートを思考のツールとして使ったり、上位の学年の生徒の作業学習の動画を流したりするなどの指導上の工夫を行うことで作業学習を行う意義について理解が深まり、めあてをもって作業学習に取り組むようになったことが報告されている。また、土居・是永（2021）は WHO が提唱した「ライフスキル」と関連づけた実践を報告している。「ライフスキル」とは日常生活で生じる様々な問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するための能力」である。道徳教育の内容は「ライフスキル」教育の内容と親和性が高いことを報告しており、日常的なことを中心に扱い体験的な活動を通すことで道徳的価値についての理解も深めることを指摘している。さらに、土居・是永（2022a）は「ライフスキル」の観点に基づいて情報モラルに関する道徳科の授業の実践を報告している。集団を言語能力に応じて3グループにわけ、発達段階に応じたワークシートや表現方法を用いた。また、場面の説明や言葉の定義づけ、教師によるロールプレイなど多様な工夫を行うことで生徒の主体的な学びを促進したことを報告している。土居・是永（2022b）は「ジョハリの窓」を教材として取り入れ、「個性の伸長」についての実践を行った。土居・是永（2022a）同様、集団における言語の理解・表出に発達段階の差が激しいため、グループに分けての実践を行っている。教材としての「ジョハリの窓」が他者を通じて、多面的な自己理解につながるツールであるとともに、言葉の言い換えや長所の価値づけ、具体例の提案など丁寧な手立ての重要性を指摘している。

このように、知的障害特別支援学校の高等部段階における道徳科授業の実践に関する研究動向を概観すると、就労を視野に入れた問題解決的な学習の実践が多いことが推察される。また、知的障害のある生徒は高等部から特別支援学校に入学することが多いため、学習集団の発達段階のばらつきが大きい実態がある中で、学習集団をさらに発達段階に応じ

てグループ化したり、ワークシートや表現方法を変えたりするなど適切な支援が行われていた。

3. 3. 肢体不自由特別支援学校での道徳科授業の実践に関する研究動向

肢体不自由特別支援学校での道徳科授業の実践は1編であり、いわゆる準ずる課程の小学部の実践である。河野（2016）は、障害の特性の傾向から社会経験が限定化されてしまい、ソーシャルスキルや正しい道徳観念の育成が難しい肢体不自由児のコミュニケーションの発達に焦点を当て授業実践を行った。手紙を書いて、家族や友人に思いを伝える活動が中心であり、授業の成果として、学校生活の中で自信を持って生活できるようになり、コミュニケーションをとることへの意欲が促進されたことが報告されている。なお、対象児童がある程度書字については自立していたからか、身体への支援に関する記述は見られなかった。

3. 4. その他障害種の特別支援学校の道徳科授業の実践に関する研究動向

聴覚障害特別支援学校、視覚障害特別支援学校、病弱特別支援学校での道徳科授業の実践に関する研究は確認できなかった。これらの特別支援学校においても道徳科が教育課程に位置づけられており、小・中学校の目標及び内容に準ずることとなっているものの、障害の特性やそれに伴う社会経験の制限や偏りを踏まえ、授業内容や指導方法を工夫することが求められている（田中，2020）。また、道徳科の教科化に伴い導入された教科用図書の内容を見ると、小学校・中学校ともに視覚障害、聴覚障害、病弱・身体虚弱に関する教材が複数扱われていることが報告されている（青木・田中・奥住・大井，2021）。また、通常の学級での調査ではあるが、病気のある児童に病気の教材を扱った授業を行った成果として、自己理解が促進されることが報告されており（青木・田中・大井・奥住・小林，2021）、聴覚障害特別支援学校、視覚障害特別支援学校、病弱特別支援学校での道徳科の実践においても同様のことが期待できるであろう。これらのことを踏まえ、実際にどのような道徳科授業が行われているのかを明らかにすることは早急に解決すべき課題である。

4. まとめにかえて

本稿では、特別支援学校における道徳科授業の実践について、教育課程上の位置づけを確認したうえで、研究動向について整理した。

現在、知的障害特別支援学校の道徳教育の課題として、「言語の理解・表出の困難」、「抽象的な内容の扱い」、「考え、議論する道徳」が挙げられているが（齋藤，2021）、本稿で概観した研究の内容のほとんどはこれらの課題を解決するべく取り組みが多かった。具体的には（1）選択カードの利用や翻訳的支援による表現の多様化、（2）体験活動の導入、（3）コミュニケーションスキルに応じたグルーピングである。その他には、基本的な支援として写真や動画を使用した視覚的な情報提供、GIGA スクール構想やプログラミング教育と連動した ICT 機器の使用なども挙げられた。これらの支援は児童生徒が発達段階に応じて道徳的価値について主体的に考えるうえで有用な支援であることが推察されるため、教育現場での汎用が期待される。これらの取り組みは、小学校学習指導要領解説（平成29年告示）特別の教科 道徳編にある「表現活動の工夫」「体験の生かし方を工夫

した指導」「話し合いの工夫」と重なる。つまり、特別支援学校における道徳科授業の実践上の工夫は、小・中学校の特別支援学級や通常の学級に在籍する学習障害等発達障害の傾向を示す児童・生徒の指導・支援の構築並びに教育課程の編成に活用できることが想定された。特に通常の学級においては「授業のユニバーサルデザイン化」など学級全体に対する支援の視点に注目が集まっているが（青木，2022）、これらの活動を児童生徒の実態に応じて計画的に・意図的に取り入れることで障害の有無にかかわらず全ての児童生徒が「わかる・できる」と感じる道徳科授業の実現の一助となろう。

なお、本研究において対象となった特別支援学校での道徳科授業の実践に関する研究は12編にとどまり、その報告が少ないことは注目すべき点であろう。これについては引き続き実践と研究を積んでいく必要性が推察された。特別支援学級や通常の学級における発達障害等のある児童生徒への道徳科での支援についても研究は散見される程度であるため、それぞれの学びの場における特別支援教育と道徳科を連動した実践と研究を蓄積することは、喫緊の課題として考えられた。

参考文献

- 青木利樹（2022）小学校「特別の教科 道徳」におけるクラスワイドな支援．道徳と教育, 340, 71-83.
- 青木利樹・奥住秀之・大井雄平（2021）小学校道徳科における発達障害児への特別な指導内容―「障害のある子供の教育支援の手引」と道徳科の内容項目との関連―．教育研究実践報告誌, 5（1）, 34-41.
- 青木利樹・田中亮・奥住秀之（2021）小学校「特別の教科 道徳」における発達障害児及びその傾向のある児童への指導上の工夫・配慮．東京学芸大学紀要．総合教育科学系, 72, 217-224.
- 青木利樹・田中亮・奥住秀之・大井雄平（2021）小学校・中学校における「特別の教科 道徳」の教材としての障害―障害と内容項目の関連に着目して―．教育研究実践報告誌, 4（2）, 19-26.
- 青木利樹・田中亮・大井雄平・奥住秀之・小林巖（2021）小学校「特別の教科 道徳」における病気の児童への指導の成果と課題―心理的な支援を視野に入れて―．東京学芸大学教育実践研究, 17, 17-23.
- 土居一平・是永かな子（2021）特別支援学校におけるライフスキルトレーニングの実践と効果―ライフスキルトレーニングの視点に基づく道徳等の授業内容の検討―．高知大学学校教育研究, 3, 249-258.
- 土居一平・是永かな子（2022a）知的障害特別支援学校における情報モラルに関する道徳の授業実践―ライフスキルの観点に基づいて―．高知大学学校教育研究, 4, 167-174.
- 土居一平・是永かな子（2022b）知的障害特別支援学校高等部における道徳の授業実践―「ジョハリの窓」を活用した新たな長所の獲得―．高知大学教育学部研究報告, 82, 245-252.
- 日置健児朗・本吉大介・今井伸和・高崎文子（2021）知的障害特別支援学校中学部での道徳的価値を育む授業づくり：「特別の教科 道徳」における授業内容設定の考え方と代弁的・翻訳的な（補助自我）支援の在り方．熊本大学教育実践研究, 38, 123-128.

- 細川かおり・眞城知己・磯山多可子（2017）知的障害特別支援学校における道徳に関する検討. 千葉大学教育学部研究紀要, 65, 129-136.
- 今井伸和（2020）特別支援学校における道徳科の指導法とその評価: 緘黙の子どもの思考は代弁・翻訳しうるか. 熊本大学教育実践研究, 37, 67-76.
- 今井伸和（2021）特別支援学校における道徳科の指導法とその評価: 翻訳的支援の妥当性はいかに担保されるのか. 熊本大学教育実践研究, 38, 17-25.
- 河野文子（2016）肢体不自由児のコミュニケーション発達支援について: 道徳の指導を通して. 筑波大学附属桐ヶ丘特別支援学校 研究紀要, 52, 157-162.
- 松本将孝（2021）知的障害教育における「特別の教科 道徳」の指導方法の実践的検討. 大阪教育大学附属特別支援学校 紀要, 2, 88-97.
- 文部科学省（2016）「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告）. https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/08/15/1375482_2.pdf. 2021.8.18.
- 文部科学省（2017）特別支援学校小学部・中学部学習指導要領.
- 文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説「特別の教科 道徳編」廣済堂あかつき.
- 文部科学省（2019）特別支援学校高等部学習指導要領.
- 永田繁雄・松尾直博・面川怜花・川井優子・齋藤大地・幸阪創平（2017）「特別の教科 道徳」における問題解決的な学習と評価の研究. 東京学芸大学附属学校研究紀要, 44, 19-35.
- 奥住秀之（2021）「特別な」教育の場 その意義と課題 第1節 特別支援学校. 高橋智・加瀬進（監修）日本特別ニーズ教育学会（編）現代の特別ニーズ教育 文理閣, 81-90.
- 齋藤大地（2021）知的障害特別支援学校における道徳教育に関する現状と課題－全国国立大学附属特別支援学校を対象とした質問紙調査から－. 宇都宮大学共同教育学部研究紀要. 第1部, 71, 45-58.
- 下崎聖・百瀬光一（2018）作業学習の充実化を図る道徳科授業－考え、議論する教材の開発－. 教材学研究, 29, 65-74.
- 田中亮（2020）病弱教育の現代的な課題と専門性. SNE ジャーナル, 26（1）, 27-43.
- 山崎智仁・伊藤美和・水内豊和（2021）知的障害特別支援学校におけるプログラミング活動を取り入れた道徳教育の実践: 生命の尊さをテーマとした食育の学びから. 富山大学人間発達科学部紀要, 16(1), 37-42.